

第31号

奈良 国立博物館 だより

平成11年 10・11・12月

特別展

第51回 正倉院展

東・西新館

10月26日(火)～11月14日(日)

会期中無休

午前9時～午後5時

(入館は午後4時30分)

金曜日は午後8時まで

(入館は午後7時30分まで)

特別陳列

大和の神々と美術

東新館(南)

12月7日(火)～1月23日(日)

平常展

仏教美術の名品

本館 10月1日(金)～11月28日(日)

西新館 ～10月3日(日)、

11月30日(火)～12月25日(土)

年末年始の休館：12月26日(日)～1月3日(月)

〔写真解説〕

鳥毛立女屏風(正倉院宝物)

(第三扇) 長135.8cm 幅56.0cm

聖武天皇の遺愛品で、正倉院宝物のなかでも最も著名なものの一つ。各扇とも5枚継ぎの本紙に白土を塗り、その上に墨で女性・樹木・岩などを描き、肉身に彩色を施す。現在はほとんど剥落しているものの、当初は頭髮・着衣・飛鳥などに鳥の羽毛を貼り付けていた。鳥毛や本紙に用いられた文書から日本製であることが明らかとなっている。各扇に描かれているのは、中国盛唐時代の婦女とみられ、中国画の原本に基づいて作られたものとみられる。

(「正倉院展」より)



第51回 正倉院展

東・西新館 10月26日(火)～11月14日(日)

本年は、特に天皇陛下ご在位10年を記念して、通例17日間の展覧期間を20日間に延長し、それにふさわしい充実した内容となっています。出陳点数は合計75件で、うち8件が初出陳です。

その中でまず注目されるのが、正倉院でも最も有名な宝物の1つ、鳥毛立女屏風(とりげりつじょのびょうぶ)でしょう。今回の陳列では、6扇そろって出品されますので、是非お見逃しなく。

また、天平宝物筆・天平宝物墨・縹縷(すゐ はなだのる)など大仏開眼会(かいげん え)の際に用いられた品々もまとまって出陳されます。開眼供養において大仏に眼睛を点じる際に、天平宝物筆の端に縹縷の紐を結び、それを長く伸ばして参列者が手を添え、開眼の功德に浴したといわれています。縹縷の推定長は200m近くに及ぶものとみられ、大型の天平宝物筆や天平宝物墨とともに、大仏開眼会の壮大さをしのばせる遺品です。

聖武天皇ゆかりの品も少なくありません。九條刺納樹皮色袈裟(くじょうし のうじゅ ひしよくのけ き)は、『国家珍宝帳』の筆頭に挙げられ、聖武天皇御遺愛品の中でも最も重要な位置を占めていたことがわかる宝物です。聖武天皇や光明皇后がご使用になったと考えられる御床(ごしょう 寝台)、それに付属の畳・褥(じよく 敷物)、覆(おおい ベッドカバー)が一堂に展示される点もみどころの一つでしょう。

このほかにも、金銀細工など唐代工芸の粋を示す、金銀平脱(きんぎんへいだつ)八花鏡・金銀平文琴(きんぎんへいもん きん)や金銀花盤(きんぎんのかばん)、文様の大きさや複雑さなどからみて、上代の錦の中で傑出した優品とされる琵琶袋残欠(びわのふくろ)など、名品揃いです。

最後に特筆したいのは、今回の正倉院展の会場が、例年と大きく変わった点です。正倉院展は従来から西新館を会場としていましたが、本年は西新館に加えて、新たにオープンした東新館との両館で開催いたします。混雑を緩和し、来館者の方に少しでも良い観覧条件を整えることができればと考えています。昨年の50回を折目に、少し新たな装いの正倉院展をご堪能ください。

特別陳列

大和の神々と美術

東新館(南) 12月7日(火)～1月23日(日)

12月17日には、春日若宮の「おん祭」が催されます。例年、この「おん祭」にちなみ、春日大社所蔵品を初めとする春日信仰に関する作品を展示してきましたが、本年は内容を広げ、「大和の神々と美術」と題して奈良の神道美術を陳列いたします。

平常展

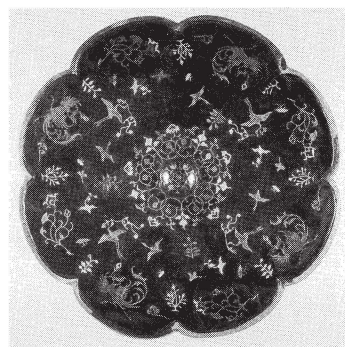
仏教美術の名品

本館 10月1日(金)～11月28日(日)

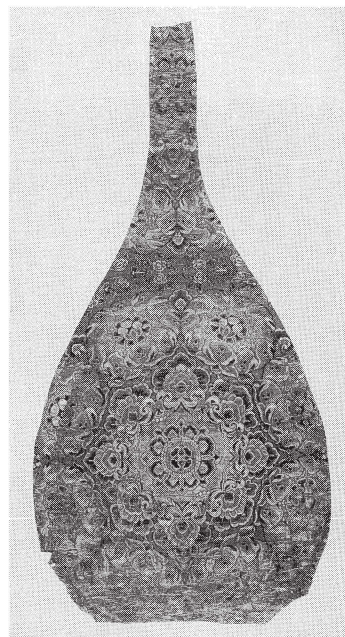
西新館 ～10月3日(日)、11月30日(火)～12月25日(土)

本館では、合計10のテーマで展示を構成し、西新館では、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古といったジャンル別で展示を行っています。

なお、正倉院展期間中は本館でのみ平常展を開催し、11月29日以降には本館が工事に入るために閉室となり、西新館のみの平常展となります。



金銀平脱八花鏡



琵琶袋残欠



鹿島立神影図(当館)

【**仏具**】九條刺納樹皮色袈裟、吉字刺繡飾方形天蓋残欠、金銅雲花形裁文、金銅鳳形裁文

【**家具・調度品**】鳥毛立女屏風、御床、御床畳残欠、白橡地亀甲錦褥残欠、御床覆、白練綾大枕、柿厨子、赤漆密陀絵雲兎形櫃、鳥獸花背円鏡ならびに緋絶帯・題箋・八角楯匣、鳥獸花背円鏡　ならびに緒・金銀絵鏡箱、平螺鈿背円鏡ならびに緋絶帯・漆皮箱、金銀平脱八花鏡

【**威儀具・服飾**】紺玉帯残欠と螺鈿箱、樺纏把鞆白銀玉虫荘刀子、斑犀把漆鞘銀漆荘刀子、烏犀把漆鞘樺纏黄金珠玉荘刀子、斑犀把金銀鞘刀子、大魚骨笏、衲御礼履、赤漆履箱

【**開眼会用物**】天平宝物筆、天平宝物墨、縹縷ならびに紙箋

【**飲食器**】金銀花盤、銀盤、金銅小盤、漆彩絵花形皿、金銅六曲花形坏、佐波理水瓶、金銀匙、金銀箸

【**献物箱・几**】密陀彩絵箱ならびに金銅繩子、金銀絵木理箱、蘇芳地金銀絵箱、粉地金銀絵八角長几、仮作黒柿長方几

【**楽器**】金銀平文琴、玉尺八、斑竹横笛、呉竹笙、白絃ならびに木牌、斑絃ならびに木牌、中小絃ならびに木牌、箏絃ならびに木牌、銀平脱合子（弦の容器）

【**染織品**】茶臈纈純半臂、白橡純袷袈、黄布袍、花喰鳥刺繡残欠、白橡綾錦几褥、琵琶袋残欠、縹地大唐花文錦、緑地霞花文錦、緑地目交纈纈純、樹下鳳凰双羊文白綾

【**文書・記録類**】斉衡三年六月二十五日雑財物実録、正倉院古文書のうち駿河国正税帳（天平九・十）、御野国本簀郡栗栖太里戸籍（大宝二）、写経勘出注文、買新羅物解（天平勝宝四）、造東大寺司画師召文（天平宝字二）、鏡背下絵・大大論戯画ほか、東南院古文書のうち越中国司解（神護景雲元・十一・十六）、殿堂平面図、東大寺開田地図

【**經典**】摩訶般若波羅蜜經卷第29、大宝積經卷第15、央掘魔羅經卷第2、梵網經ならびに檜金銀絵経筒



金銀花盤

＜本館＞ ー11月28日

1室 奈良の美術

【彫刻】◎木造阿弥陀如来坐像（金剛山寺）、●木造薬師如来立像（元興寺）、◎木造十二神将立像（東大寺）、●乾漆八部衆像のうち緊那羅立像、●乾漆十大弟子像のうち目犍連・舍利弗立像（以上興福寺）、●木心乾漆義淵僧正坐像（岡寺）、●木造法相六祖像のうち行賀坐像（興福寺）、◎木造重源上人坐像（浄土寺）、◎銅造弥勒菩薩半跏像（神野寺）、◎銅造観音菩薩立像（法隆寺）、◎銅造観音菩薩立像（金剛寺）、◎銅造薬師如来立像（般若寺）、銅造観音菩薩立像（当館）、【絵画】板絵補陀落山図・十一面観音来迎図（海住山寺）【工芸】◎当麻曼荼羅厨子扉（当麻寺）

2室 阿弥陀浄土と観音・地藏・弥勒信仰

【彫刻】◎木造阿弥陀如来立像（浄土寺）、木造阿弥陀如来及両脇侍立像（峰定寺）、木造弥勒菩薩立像（林小路町）、木造地藏菩薩立像（長谷寺）、◎木造地藏菩薩立像（春覚寺）、◎木造地藏菩薩立像（長命寺）、◎木造千手観音立像（妙法院）、◎木造千手観音立像（園城寺）、◎木造十一面観音立像（勝林寺）、◎木造十一面観音立像（薬師寺）、◎木造十一面観音立像（地福寺）、◎木造聖観音立像（観心寺）

3室 密教の美術

【彫刻】◎木造梵天立像、◎木造伝教脱菩薩立像（以上秋篠寺）、◎木造紅玻璃阿弥陀如来坐像（当麻寺）、木造大日如来坐像（当館）、◎木造不動明王坐像（正寿院）、◎木造馬頭観音立像（浄瑠璃寺）【絵画】10月5日～31日：如意輪観音像（当館）、11月2日～28日：千手観音二十八部衆像（当館）【工芸】古式三鈷杵、独鈷杵、三鈷杵、五鈷杵（以上当館）、◎鏡（円福寺）、◎五鈷四天王鈴（弥谷寺）、五鈷種子鈴（細見美術財団）、五鈷鈴、五鈷種子鈴（以上当館）、◎独鈷鈴、◎三鈷鈴、◎宝珠鈴（以上細見美術財団）、五鈷鈴、塔鈴、輪宝、羯磨（当館）、一面器・飲食器、●鉄宝塔（以上西大寺）、◎銅草花文磬（峰定寺）、◎蓮華形磬（赤松院）、梵鐘（海住山寺）

4室 ガンダーラ・中国・韓国の仏教美術

【彫刻】石造如来立像、石造菩薩立像、ストゥッコ如来坐像、ストゥッコ菩薩立像、ストゥッコ如来頭部〈ガンダーラ〉（以上個人蔵）、石造仏伝図浮彫〈ガンダーラ〉（当館）、石造菩薩立像、石造如来坐像、石造菩薩立像〈以上北斉〉、木造諸尊仏龕、金銅菩薩立像、◎石造如来三尊像〈以上唐〉（以上個人蔵）、金銅如来立像〈統一新羅〉（光明寺）、金銅如来立像〈統一新羅〉（当館）【工芸】舍利容器〈クシャーナ〉（当館）

6・7室 本地垂迹の世界

【彫刻】●木造八幡三神像（薬師寺）、木造男女神像（当館）、木造童子形神像（個人蔵）、◎銅造蔵王権現立像（大峰山寺）【絵画】10月5日～31日：藤原武智麻呂像（荣山寺）、春日宮曼荼羅（当館）、11月2日～28日：天神像（長谷寺）、富士参詣曼荼羅（個人蔵）【工芸】◎十二尊鏡像（細見美術財団）、◎阿弥陀如来鏡像、千手観音鏡像、男神鏡像（以上当館）

8室 写経の美

【書跡】大般若経〈長屋王願経〉（見性庵）、大悲経〈五月一日経〉（正暦寺）、自在王菩薩経〈五月十一日経〉（海龍王寺）、大般若経（東明寺）、紺紙金字摩訶僧祇律卷第十九〈神護寺経〉（当館）、大般若経（長弓寺）、大般若経卷第四百十八〈東大寺八幡経〉、版本大般若経卷第三百六十五（以上当館）

9室 古代の寺院

【考古】百济出土古瓦（個人蔵）、高句麗出土古瓦（当館）、法隆寺出土古瓦（法隆寺）、山村廃寺出土蓮華文鬼瓦（個人蔵）、奥山久米寺出土蓮華文鬼瓦（京都国立博物館）、中山瓦窯出土鬼瓦（当館）、秋篠寺出土鬼瓦、◎大安寺出土鬼瓦（以上個人蔵）、橘寺出土方形三尊博仏（当館）、川原寺裏山出土方形三尊博仏（明日香村）、南法華寺出土方形三尊博仏（南法華寺）、天花寺出土博仏、定林寺出土塑像頭部（以上当館）、川原寺裏山出土塑像頭部（明日香村）、本薬師寺出土塑像頭部（薬師寺）

10室 舍利信仰

【工芸】◎首掛駄都種子曼荼羅厨子（当館）、獅子舍利塔（金剛寺）、◎五輪塔形舍利容器（浄土寺）、五輪塔嵌装舍利厨子（当館）

11室 釈迦と法華経信仰

【彫刻】10月5日～11月28日：◎木造釈迦如来立像〈清凉寺式〉、木造出山釈迦如来立像（以上当館）◎銅板法華説相図（長谷寺）【絵画】10月5日～31日：法華経曼荼羅（当館）、◎仏涅槃図（正暦寺）、11月2日～28日：普賢十羅刹女像（当館）、◎法華経宝塔曼荼羅（談山神社）【書跡】紫紙金字法華経（当館）【考古】粉河経塚出土銅経筒・外筒・紙本墨書法華経（以上当館）、◎長安寺経塚出土銅板経（長安寺）、福岡・飯盛山経塚出土瓦経（当館）

12室 禅の美術

【絵画】◎十六羅漢図（建仁寺）、◎五百羅漢図（大徳寺）

13室 正倉院宝物の世界

新羅墨、筆、黒漆三合鞘刀子、紫檀把黒漆二合鞘刀子、斑犀把白牙鞘金銅荘刀子、紫檀把牟久木鞘金銅荘刀子、金銀荘大刀、黒作大刀、火舎、檜和琴、子日手辛鋸・粉地彩絵倚几、子日目利箒・粉地彩絵倚几、紅牙撥鏝尺、紅牙撥鏝尺、緑牙撥鏝尺、紅牙撥鏝尺、紅牙撥鏝棊子、紺牙撥鏝棊子（以上当館）

＜西新館＞ 11月30日～12月25日

【彫刻】木造阿弥陀如来立像（個人蔵）、木造阿弥陀如来坐像（当館）、木造阿弥陀如来坐像（金剛寺）、銅造阿弥陀如来及両脇侍像（東京国立博物館）、◎木造釈迦如来坐像（法隆寺）、◎木造如来坐像（興福寺）、銅造釈迦如来坐像（園城寺）、木造出山釈迦如来立像、木造釈迦如来立像〈清凉寺式〉、木造阿弥陀如来立像〈裸形阿弥陀〉、●木造薬師如来坐像（以上当館）、◎木造千手観音立像〈准胝観音〉、木造聖観音立像（以上個人蔵）、木造地藏菩薩立像（大福寺）、木造地藏菩薩立像（正覚寺）、◎木造不動明王坐像（園城寺）、銅造不動明王立像、木造広目天立像（以上当館）、木造増長天立像（法明寺）、木造十二神将立像（当館）、木造大黒天立像（西大寺）、木造南無仏太子立像（法起寺）、◎木造閻魔王倚像（金剛山寺）、【絵画】◎仏涅槃図（達磨寺）、釈迦三尊十六善神像（西大寺）、覚禅鈔（勸修寺）、◎普賢菩薩像（当館）、◎文殊菩薩像（西大寺）、◎十一面観音像（太山寺）、◎虚空蔵菩薩像（当館）、◎阿弥陀来迎図（阿日寺）、弥勒来迎図（個人蔵）、十王像（当館）

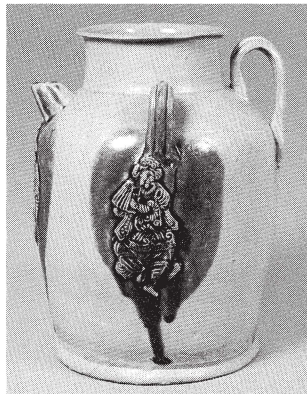
【書跡】●六祖惠能伝（延暦寺）、●開元寺求法目録、●円珍俗姓系図（以上園城寺）、◎春日権現講式（高山寺）、観音講式、◎金剛般若集験記、叡山拝堂記（以上当館）

【工芸】銭弘俣八万四千塔、宝篋印塔、宝塔形舍利容器（以上当館）、金銅火焰宝珠形舍利容器（個人蔵）、金亀舍利塔（長谷寺）、舍利厨子（福田寺）、黒漆塗舍利厨子（個人蔵）、百万塔、●蓮花草蔕絵経箱（以上当館）、◎金銅透彫経筒（万徳寺）、●金銅透彫華鬘、●金銅透彫幡頭（以上中尊寺金色院）、◎金銅透彫華鬘、●牛皮華鬘、◎刺繡三昧耶幡、錦幡（以上当館）、●金銅透彫華籠（神照寺）、竹製華籠（性海寺）、金銅装説相箱（個人蔵）、◎黒漆戒体箱（万徳寺）、◎宝相華文如意、錫杖頭（以上当館）、◎堆朱香合盆（聖衆来迎寺）、柄香炉（高山寺）、柄香炉（当館）、金山寺香炉（長谷寺）、火舎、散蓮華蝶文螺鈿卓、磬架、孔雀文磬（以上当館）

【考古】◎伝福岡県出土経筒・外筒、伝福岡県四王寺山経塚出土経筒、伝愛媛県北条市出土陶製経筒、伝和歌山県白浜経塚出土品、和歌山・粉河経塚出土経筒・外筒、東京・松蓮寺経塚出土経筒（以上当館）、東京・松蓮寺経塚出土経筒（個人蔵）、福島・木幡山経塚出土経筒・外筒、銅経筒（以上当館）、奈良・金峯山経塚出土紺紙金字法華経（金峯神社）、和歌山・粉河経塚出土紙本墨書法華経、伝大分県出土紙本朱書経（以上当館）、◎大分・長安寺経塚出土銅板経（長安寺）、福岡・飯盛山経塚出土瓦経、愛媛・大日堂経塚出土青石経、鳥取・智積寺経塚出土泥塔経、◎佐井寺僧道薬墓出土品、◎出雲荻杼古墓出土品（以上当館）、◎青磁鉢（正暦寺）、黄釉褐彩貼花人物文水注、白釉緑彩水注、青磁双耳瓶、青白磁水注、青白磁花唐子文輪花鉢、青白磁花唐子文鉢（以上当館）



◎木造千手観音立像
〈准胝観音〉（個人蔵）



黄釉褐彩貼花人物文水注（当館）

正倉院宝物 こんぎょくおひのざんけつ 紺玉帯残欠

紺玉で飾られた皮製のベルト。紺玉とは、ラピスラズリと呼ばれる貴石で、その産地としてはアフガニスタンのバダフシャンがよく知られています。この紺玉も、中国より西方の地からはるばると日本にもたらされたものと推測されます。シルクロードと関連付けられることの多い正倉院宝物ですが、その現物として東西交易路を運ばれたことが確実にわかるものは意外に少なく、その点で本品は貴重な宝物の一つと言えます。



さて、このベルト、どのような人が身につけていたのか、気になりますか？ 以前の図録解説などでは、六位以下の中下級役人用としたり、単に相当身分の高い人物が着用していたのだらうといった推測がなされたりしています。少し大胆に？、推論を巡らしてみましよう。

紺玉帯はいつ作られたのか？

まず、その問題に入る前に、前提としてこの帯の製作年代からみていくことにします。この紺玉帯の特徴は、石に貫通する穴を開け、鋳を打ち込んで革帯に留めている点です。この種の貫通孔をもつ石製帯飾りは、発掘などによる出土例が極めて少なく、例えば長岡京跡（784～794年）では現在までのところたった1例で、他は潜り穴と呼ばれる表に穴が貫通しないタイプのもので、平安京跡からの出土品も、やはり潜り穴タイプです。ところが、正倉院宝物に含まれる斑貝鞆膜御帯は貫通孔タイプ。斑貝帯は『国家珍宝帳』に記されており、明らかに天平勝宝八歳（756）に献納されたものです。とすると、紺玉帯は、基本的に長岡京以前、奈良時代の革帯の可能性が強くなります。

奈良時代の衣服の法律には？

さて、問題の着用者ですが、奈良時代には『衣服令』という法律があり、朝廷の公事に着用する「朝服」は一品以下、五位以上が金銀装腰帶で、六位以下が烏油腰帶、おそらく黒漆塗り銅製帯飾りのもの、となっています。ところが、玉帯はこの中に含まれていません。一方、中国・唐における規定をみると、文武四品が金帯、文武三品已上のみが金玉帯とされており、玉帯が金帯の上に位置することになります。そうすると、日本の『衣服令』に玉帯の規定がないのも、たまたま記述がなかったというより、日本でも玉帯が金銀装の腰帶のさらに上位、すなわち一品より上に相当する天皇にほぼ限定されていたため、明文化されなかった可能性が出てくるでしょう。

紺玉帯の着用者は？

平安時代の法律集『延喜式』には、白玉帯は参議以上と規定されています。平安時代に入っすぐ延暦十四年（796）に参議以上に白玉帯が許されていることから、おそらくその段階に白玉帯の着用を許される範囲が正式に拡大したのでしょう。平城京跡からは確実に奈良時代に属する石（玉）製帯飾りの出土がないとされるのに対し、平安京跡では白玉に相当するものが出土するようになるのも、そのあたりの事情を反映するものと判断されます。

また先の『延喜式』には、斑犀帯が五位以上と規定され、白玉帯より少し低い位置付けがなされていますが、正倉院の斑犀帯は、『国家珍宝帳』にも「御帯」とされているように、奈良時代の天皇の腰帶とみられます。平安時代でも斑犀帯より上位の玉帯が、奈良期において天皇によって用いられていても何ら不思議ではないでしょう。

ただし、言うまでもなく、紺玉帯は白玉帯ではありません。ところが、この紺玉帯は院蔵の斑犀御帯と同様に銀製の裏座金具を持っており、同じ御帯とされる斑貝帯は銀よりおそらくランクが下の金銅製です。紺玉帯に斑犀御帯や斑貝御帯と同等の着用者を想定しても決して矛盾はしないでしょう。しかも、紺玉はアフガニスタンが主産地とされ、白玉以上に希少なものです。こうみえてくると、おのずとその着用できる人は限定されてくるはず。みなさんの考えは、いかがでしょうか？

紺玉帯の製作地は？

天皇が用いる供御物などの製作を行っていた内匠寮には「玉石帶工」と呼ばれる技術者がいたことが知られており、紺玉帯もそれらの工人の製作によるものかもしれません。中国での出土品において紺玉帯とそっくりなものは管見では未確認ですが、従来から指摘のあるように、中国での製作の可能性も残されます。今後出土資料が増加すれば、製作地の判別も可能になってくることでしょう。

正倉院宝物の謎解きは、まだまだ始まったばかりです。

（高橋照彦）

◆正倉院展 公開講座

10月30日(土)	正倉院の鏡	奈良県立橿原考古学研究所長	樋口 隆康
11月6日(土)	正倉院の漆工―展覧品を中心に―	宮内庁正倉院事務所保存課長	木村 法光
11月13日(土)	奈良朝の供養具―金銀花盤をめぐって―	工芸室長	内藤 栄

いずれも午後1時30分より3時まで。講堂にて。聴講無料。ただし先着200名。

◆ギャラリートーク 毎月第2水曜日に実施しています。

10月13日(水)	一木造りと寄木造り	仏教美術研究室長	松浦 正昭
11月10日(水)	密教の工芸	工芸室長	内藤 栄
12月8日(水)	神道美術	企画普及室研究員	伊東 哲夫

いずれも午後2時より。陳列室にて。入館者の聴講自由。

◆親と子の文化財教室 小学5・6年生と中学生、その保護者を対象にした教室です。

今年度は「平安時代の歴史と美術」(第2クール)をテーマに勉強しています。			
10月9日(土)	最澄と空海はどんな字を書いたのか	資料管理研究室長	西山 厚
11月27日(土)	経塚―お経のタイムカプセル―	考古室長	井口 喜晴
12月11日(土)	桓武天皇と藤原北家の台頭	学習普及専門官	坎田 俊作

ハガキに氏名・住所・郵便番号・学校名・学年・電話番号・同伴する保護者の氏名・参加を希望する月日(いくつでもかまいません)を記入して申し込んで下さい。参加料は無料です。定員は200名(先着順)です。お問合せは学習普及専門官(電話0742-22-7008)まで。

◆ボランティアによる解説

ボランティアによる解説を展示室(正倉院展期間中は講堂)で行っています。解説は、開館日の10:00～ 11:00～ 14:00～ 15:00～ の4回(約30分間)を予定しています。

この他、「プレ見学講座」として、コンピューター画像などで仏像鑑賞の基礎知識を解説する「ぶつぞう入門」(30分)と、東大寺や法隆寺など、寺院別の解説6コース(5分～15分)が用意されており、自由に組み合わせることができます。予約をすれば講堂または学習室でボランティアが画面に合わせて解説をします。お問合せは学習普及専門官(電話0742-22-7008)まで。

開館時間 午前9時より午後4時30分まで(入館は午後4時まで)
金曜日は午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
正倉院展期間中は、金曜日を除き午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

休館日 月曜日(月曜日が祝日または振替休日の場合は開館し、翌日が休館)
ただし正倉院展期間中は無休)

観覧料金 毎月第2・4土曜日は、小・中学生無料

正倉院展		大人	高・大生	小・中生
	一般	830円	450円	250円
	団体	560円	250円	130円

平常展		大人	高・大生	小・中生
	一般	420円	130円	70円
	団体	210円	70円	40円

*団体は責任者が引率する20名以上(ただし正倉院展期間中の土・日・祝日は団体扱いをしません)。

*特別展料金で平常展もあわせて観覧できます。

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒(80円切手貼付、宛名明記)を同封して、当館の普及室にお申し込み下さい。

〒630-8213 奈良市登大路町50 電話0742-22-7771 FAX0742-26-7218 テレフォンサービス0742-22-3331 **奈良国立博物館**
ホームページ <URL> <http://www.narahaku.go.jp/>